

**読み先習の意義はわかったが、具体的には、いつ、どのように  
“書く”指導を始めるのか。**

幼児は、漢字を読む学習によって、頭を働かせ、知能を高めることができるのであって、漢字を書く学習によっては、そのようなことは期待できません。

小学校や中学校でよく見られる“漢字の書取り練習”は、全く無意味だとは申しませんが、無駄なことだと思っています。同じ字をくり返し書くことによって、認識を深めるのだということですが、本人が自主的に、工夫しつくり返すのでしたら意味がありますが、画一的に 20 字ずつ、とか、一ページとかと課する学習は、子供の頭を良くしないで、かえって頭の働きのにぶい、気力のない子供にするだけではないかと心配されます。

ああいう書取り練習では、頭を働かせるよりも、頭の活動をおさえることになると思います。

林巖氏の『頭脳』という本の中に、“頭を良くする方法”として、栄養と睡眠のほかには、“頭を使う”ことだけだとあり、その“頭を使う”こと

の中で、最も有効なのは“本を読むこと”だと書いていらっしゃいます。つまり教育の面から“頭を良くする”最良の方法は“読む”ことだということなのです。

昔から、“読み書き”と並称され、漢字は読めても書けなければ価値がないように思われてきましたので、つい“書けなければ”という気持になると思いますが、今は、そういう気持を捨てて、虚心に、その価値を考えていただきたいと思います。

そうすれば、書く学習は、幼稚園や家庭でやらせる必要は全くないことがわかりいただけだと思います。小学校へ進んでから、学校での学習に任せればよいのです。

くり返して申し上げます。子供は、“読む”ことによって頭の働きを良くすることができるのです。漢字は読めればよいのです。“書く”学習など無駄なことです。幼稚園や家庭ではやらせないでください。